第66回

上高井教育研究集会概要

令和元年度

上　高　井　教　育　会

上高井校長教頭組合

県教職員組合上高井支部

――― 目　　次 ―――

まえがき …… 1

大会スナップ …… 2

１　子どもの適応と人間関係づくり …… 4

２　子どもの生活づくり …… 5

３　キャリア教育と進路指導 …… 6

４　人権同和教育 …… 7

５　健康教育 …… 8

６　子どもと地域社会と環境づくり …… 9

７　子どもとスポーツ･遊び …… 10

８　教育条件の整備 …… 11

９　情報教育 …… 12

10　国際理解・コミュニケーション活動 …… 13

11　特別支援教育 …… 14

12　表現力・感性、思考力の育成 …… 15

13　子どもと本 …… 16

あとがき …… 17

ま　え　が　き

上高井教育会、上高井校長教頭組合、長野県教職員組合上高井支部の三者共催による「第６６回上高井教育研究集会」を、去る8月31日（土）に墨坂中学校を会場として開催いたしましたところ、会員、保護者、地域の方々を含め、600 名余の皆様方のご参加をいただき、盛会のうちに終了することができました。

ご多用の中、県議会議員　堀内孝人様、小林君男様、須坂市、小布施町、高山村の教育長の皆様方をはじめ、上高井の教育を支えていただいているご来賓の皆様方のご臨席を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

また、地域の皆様、ＰＴＡの皆様、教育関係者の皆様には、早朝よりご参集をいただきありがとうございました。さらに、助言者の皆様方には、ご多用にもかかわらず快くお引き受けいただき、具体的で分かりやすいご助言・ご指導を賜り、実りある研究集会となりました。誠にありがとうございました。

近年、少子高齢化や高度情報化、子どもの貧困の問題など、子どもたちを取り巻く家庭・社会環境が大きく変化し、人と人との結びつきの希薄化や子どもたちの学ぶ意欲や学力・体力の低下、ゲームや携帯電話・スマートフォンなど、インターネットに絡む問題や依存の問題、地域の教育力の低下など、多くの課題が指摘されています。こうした課題について、上高井の子どもたちにおいても例外ではないと思います。

こういった社会環境の中で生活する子どもたちの教育問題を考えるとき、学校・家庭・地域が個別の問題として捉えるのではなく、連携を強化し、地域・社会全体の教育問題として、一緒になって考え支え合うことが大事だと思います。

本研究集会におきましては、日頃の教育実践を持ち寄り、成果と課題、悩みなどを、教職員とＰＴＡの皆様方と子どもたちの教育に携わっている方々と一緒に語り合うことを通して、子ども理解を深めたり、教育支援の和を広げたりして、私たち自身の資質向上を図るとともに、「地域の子どもは地域で育てる」という地域教育に寄与する場となったのではないかと思います。地域や子どもの課題を明らかにし、解決に向けて共に学び合い、協働して課題解決に取り組むことができる上高井になることが、子どもと大人の幸せの実現につながると信じています。

本集会で考え合ったことや体験したこと、学んだ成果を、ぜひ明日からの教育実践や家庭での教育、地域における協働・支え合いの場で少しでも生かしていただければ幸いです。上高井の子どもたちの未来のために、共に手を携えて頑張っていきましょう。

最後になりましたが、教育研究集会の開催に向けましてご尽力いただきました今井一弘研究推進委員長をはじめ推進委員の皆様、各校において推進していただいた学校代表者の皆様、分科会を運営していただいた分科会長、司会者、記録者の皆様、貴重な実践レポートを発表していただいた皆様、会場を提供し準備していただいた三溝清洋校長先生をはじめ墨坂中学校の先生方、生徒のみなさんに深く感謝申し上げます。皆様のおかげで充実した教育研究集会になりました。ありがとうございました。

上高井教育研究集会委員長　　天野　義孝

令和元年度　教研集会スナップ

分科会において、助言者の先生方には丁寧な、温かいご指導をいただきました。

本年度も、教職員、PTA、地域の皆様をはじめ、大勢の方々にご参加いただき、ともに学び会う機会となりました。参加していただいた皆様、ありがとうございました。

昨年に続き、今年度も墨坂中学校を会場に教研集会が開催されました。

会場校の先生方には、会場準備等さまざまな面でご協力いただきました。感謝申し上げます。

また、分科会長、司会者、記録者の皆様には分科会が滞りなく運営できるよう、ご尽力いただきました。

分科会にご自身の実践等を発表したいただいた皆様、お忙しい中準備をしてくださりありがとうございました。

最後に、教研集会開催にかかわり、協力してくださった方々に心より御礼申し上げます。

ありがとうございました。

第１分科会　子どもの適応と人間関係づくり

一　研究テーマ
みんなが明るく学校生活を送るための人間関係づくりのあり方

二　研究成果
１　レポート発表の概要
（１）「二人担任制をやってみて」　須坂市立相森中学校　牛山　亜由美　先生
①１学期の実践内容
・二人で行ったこと　学活　清掃指導　給食指導　学級懇談会
・分担して行ったこと　道徳（１時間ごとに交換）学級事務　個別懇談
・専属で行ったこと　日記
②生徒（保護者）の声から二人担任制を振り返る
・４月当初は不安な生徒が２割いたが、１学期終了時には不満のある生徒はいなかった。
・保護者は、相談の窓口が増えたことをありがたく思っている。
③うまくいった点
・担任それぞれの得意分野や持ち味を生かしたり、役割分担をしたりしながら生徒指導や学級事務をこなすことができた。
・担任二人がいつも連携を密にすることで、同一歩調で生徒と接することができた。

（２）「２年目の学級経営～生活科の実践から～」小布施町立栗ヶ丘小学校　山﨑　香澄　先生
①池づくり
国語の「かんさつ名人」から「メダカやエビを飼いたい」という話になり、ペットボトルで個々に生育を始めた。思いを共有する場を設けたことで、普段消極的な児童が友だちのペットボトル水槽製作を積極的に手伝ったり、大きくなったメダカを見て池づくりを決断し、友だちと協力しながら掘ったりと、友だちと関わる姿や活躍を認める声がけが自然に生まれた。

②ペットボトルシップ
水槽で使ったペットボトルの利用法を児童が考え、ペットボトルシップを作りプールで乗ることとなった。グループ分けの段階から、ふせんを用いて個々の意見を大切にしながら粘り強く話し合いをしたり、役割分担をしてペットボトルシップを製作したりすることを通して、自然とコミュニケーションが生まれ、仲間と協力する良さや達成感を味わうことができた。

２　学んだこと
（１）現在の学校現場では、より「個」を見ていく必要性があるので、二人担任制は多様な視点で生徒を捉えたり、きめ細かな対応をしたりする点で大いに有効である。
（２）児童のつぶやきを大切に取り上げていくことで、自然に活動の輪が広がり、コミュニケーション能力や成就感、友だちと協力することの良さを実感することができる。

３　助言者の指導
（１）二人担任制のポイント
①教師間の連携…コミュニケーション・情報共有が劇的に活発になる。
②ガイドラインはあったほうがよいが、柔軟に対応、見直しができることが大切。
③アンケートなどを通して、生徒、保護者の声をよく聴き反映していく。
（２）開かれた学校づくり
①生徒、保護者が相談しやすい環境づくり…職員室や校長室のドアを開けておく。
②ＳＯＳの出し方教育…様々な相談窓口を作っておく。
③教師自身が、相談しやすい開かれた心でいることを心がける。
（３）池づくり、ペットボトルシップ製作の意義
①池づくりの経験、人間関係作り、学びが「ペットボトルシップ」へとつながっていて、カリキュラムマネジメントができている。
②消極的な子どもも輝ける場、自分の考えを言える場、表現する場があることが大切。受け入れてもらった経験をたくさんした子どもは、相手を受け入れることができるようになり、自然とコミュニケーション能力も高まる。家庭も同じである。
（４）ワークショップ
・あとだしじゃんけん、あいこじゃんけん、シュウマイじゃんけん、トランスウォーク、消しゴムリレーなどのアクティビティーを行うことで、自然とお互いの良さや可能性を認め合える人間関係づくりができる。

三　残された課題
・二人担任制における進路指導の注意点
・お互いを認め合える関係を作るための活動や、授業に消極的な子どもや教室にいられない子への声がけのあり方

第２分科会　　子どもの生活づくり

一　研究テーマ　　家庭と学校・園で協力して考える、子どもの生活習慣

二　研究成果

１　レポート発表

（1）「インターネット・SNSをより良く利用するための取組み」　　常盤中学校　　安藤　晴樹 先生

常盤中学校では、４年前に生徒会の生活委員会が中心となり、インターネット・SNSに関するルール「常中ルール」を作成し、各家庭に配布をしたり、教室に掲示したりしてきた。しかし、当時ルール作成に関わった生徒たちはみな卒業し、ルールが作られた経緯を知る生徒や保護者が少なくなった。現在は、常中ルールが形骸化しているのではないかと危惧されている。また、生徒に生活習慣アンケートをすると、学年が上がるにつれて睡眠時間が減少していることが分った。携帯・スマートフォンの利用と睡眠時間との関係についての調査はしていないが、それらの利用が関係していると考えられる。そのため、常盤中学校では、保護者参加によるメディア利用に関わる学習・PTA講演会・学級PTAでの話し合い・常盤祭でのパネルディスカッション・常中ルールの再検討などを行っている。なぜルールが必要なのか、どのようなルールが必要なのか、考える過程を大事にし、学校だけでなく保護者と協力し、より実効性のある「常中ルール」の作成を目指している。

２　学んだこと

（１）小学生では通信できるゲーム機、中学生ではLINEができるスマホやタブレットなどを持っていないと、友達との話題に入れない状況がある。持たせたくないが仕方なく持たせてしまうと、学力低下・睡眠不足などの支障が出てくる。また、LINEのグループの仲間外しなどトラブルになることもある。

（２）買い与える前に、子どもと共にルール作りをすることが良い。例えば、家の人が見ているところで使用する。悪口は書き込まない。定額制にし、YouTubeなどの見放題を防ぐ。夜９時には、家族みんなでスマホなど通信できるものを一カ所に集め使用しないようにする。このように自分たちで考えルールを守れるようになると、虫歯や肥満の減少など生活が整ったという話題もでてきた。

（３）スマホなしでは生きていけない時代になったが、スマホはあくまでも道具であり、道具に支配されてはいけない。

３　助言者の指導

子どもの成長にとって「人と人とのつながり」がとても大事である。特に、０歳～５歳は大人との応答関係をもとに人間として生きる土台を育む時期である。テレビが出始めた1960年ころは「テレビに子守をさせない」と言われるようになったが、現在は「スマホに子守をさせない」という言葉がある。言葉や心を育てる時期に、親子でコミュニケーションをとり人間らしい育ちをすることが大事である。この時期に本を読み聞かせてあげるなどし、本の面白さを知っている子どもは、スマホに熱中しても本の面白さに戻ってくることができるのではないか。

また、正しい睡眠習慣もこの時期の脳の発達に欠かせない。しっかり寝ていると、午後８時過ぎにはメラトニンという精神安定のホルモンが出て眠くなり、午前４時ころからコルチゾールという覚醒のホルモンがでる。しっかり寝ていれば心が安定した生活を送ることができる。睡眠と同様に朝食も大事である。脳のエネルギーは、ブドウ糖であるのでパンよりご飯を食べると良い。やる気がない子どもは寝不足か空腹である。

大人の意見をしっかり伝え、子どもの意見も聞くなど子どもの思いを受け止めながら、愛されて育つ子どもは幸せを感じることができる。

三　残された課題

子どもと共にルールを作ることは大事だが、各家庭でルールや価値観が違うため発言力の強い友達に流されだんだんと守れなくなることがある。また、保護者自身もフィルタリングや子どもの使っているアプリなどについて知らないことが多い。大人自身もSNSなどに依存している場合もあるので、使用をコントロールすることが必要。

第３分科会　　キャリア教育と進路指導

一　研究テーマ

夢と希望をもって自分の進路を切り開いていけるキャリア教育・進路指導のあり方

二　研究成果

１．レポート発表の概要

（１）「小山小児童と須坂高校生との交流の紹介」　　小山小学校　　田中　早耶香　先生

〇昨年度・今年度　須坂高英語部との交流について

昨年度の総合的な学習「国際交流」で須坂高校留学生との交流活動。その後高校英語部より「外国語活動を参観したい」との申し出、その後外国語の授業のサポートをしてもらった。（計５時間・５，６年生中心に）今年度は１時間実施。２学期も続けていきたい。

〇須坂高校文化祭　巨大龍製作協力について

５月初め、龍製作の龍長より「うろこの色塗りの手伝い」のお願いがあった。

・子どもたちが意欲的に高校生にインタビューしようと頑張ったり、いつもと違う素敵な表情でうろこの色塗りや高校生と接していたりしていた。また文化祭に興味を持ち実際に行ったり進路を考える子どももいた。

（２）「総合的な学習としてのジュニアエコノミーカレッジへの参加」　　小山小学校　　中島　弘樹先生

〇ジュニアエコノミーカレッジ（＝JEC）《須坂商工会議所企画・商業体験（１チーム４～６人で模擬株式会社を設立し、計画・仕入れ・製造・販売・決算・納税まで）を疑似体験するプログラム》に参加。基本的には有志参加だが、今回学級単位での参加を許可してもらい行うことができた。

〇CMおよび須坂市パンフレットの製作

Goolightさんから取材に大切なことや写真撮影のポイントなど教えてもらった後、実際に地域に出かけたり取材をしたりした。JECでお世話になったお店もあり、パンフレットを届けることもできた。

・話す時間がたくさんあった（設けた）ことで、友だちの意見を聞くことの大切さや自分の表情や態度を出せる姿が見られた。また自分なりの関わり方をみつけていくことができた子が多かったと感じた。自分の考えを伝えることに苦手意識のある子が、何度も反れてしまう話を引き戻そうとしたりチームの活動について意志を伝えようとしていた。人前に出るのが苦手な子も元気よく販売の宣伝をしている姿も見られた。「問題解決能力」が育ったと思う。

（３）「キャリア教育の必要性と今後の取り組み～富山県での研修報告」　　相森中学校　　小林　順　先生

〇キャリア教育でつける力　①人間関係形成・社会形成能力　②自己理解・自己管理能力　③課題対応能力　④キャリアプランニング能力

・キャリア教育科はない。全部の場面（校内・校外）でおこなう教育。キャリア教育の充実が求められる背景として「少子高齢化の進展」「産業・雇用の変化」「グローバル化の進展」。急速な社会の状況の変化の中で、「学ぶ意味や学んだ知識技能の活用」「正解が１つではない課題にどう答えていけるか」等、生き方を考えたりこれからの社会を生きていくための力、学びに向かう力・人間性を養う必要性がある。

・「キャリアパスポート」「eポートフォリオ」の活用について。

２．助言者のご指導　　前中野立志館高等学校校長　田村　浩啓　先生

〇キャリア教育で、一番つけたい力は「選択」する力。世の中は情報に溢れていて許容範囲がなくなっているが、子どもたちの未来は広げたい。正解は１つではない。人とコミュニケーションをとる。話を聞いて自分ならどうするか意志を伝えたり試してみたりできる。

〇何かをしようとするとき、考えるだけでなく、動いてみることが大事。

〇今の子どもたちは、失敗を恐れている。失敗をネガティブな感覚でなく、うまくいかない方法の経験と思い、次に進んでほしい。型にはまらず失敗を重ねながらも歩んでほしい。

〇少子化で学校の規模が小さくなり教員数も減って活動に限りが出てしまう場合も。活動の質を良くするためにも外部（地域・地元・企業等）との交流が大切。

〇「eポートフォリオ」昨年度より高校に入った制度。全国２／３の高校で実施されている。成績以外の部分の活動等の記述が制限無く記入でき、自分のPRにつながっていく。「〇〇取得した」だけでなく、その知識・技能をどのように活用できるか具体的な記述が必要となっている。

三　残された問題

・近隣の中学生や高校生との交流など進路を切り開いていく一環として、どんな活動ができそうか。

・JECの他に、参加できそうな活動はどんなものがあるか。

・キャリア教育でつける４つの力を、校種でどうつなげていけばよいか。

第４分科会　人権同和教育

一　研究テーマ
人権を尊重し、人権問題を解決しようとする児童・生徒を育てるための指導のあり方

二　研究成果
１　レポート発表の概要
（１）各校の実践　小学校（森上小、日野小、高甫小）　中学校（常盤中、常盤中）
＜森上小＞
・低学年部会と高学年部会による研究（高学年：部落差別）
・小中高で触れさせたい個別の人権課題（部落差別）に関する指導計画
・支援、発問、問い返し、学習形態の工夫
・中学に進学する子ども達に生の声を触れさせたい。（講師）
【森上小で講演された高橋ひでかずさんの話】
・「地域を大切にしてほしい」という気持ちを伝えた。
＜日野小＞
・人権教育推進の重点　・指導方針　・職員研修会
・人権を考える市民のつどいに向けて
＜高甫小＞
・「なかよしあゆ川旬間」「平和旬間」
異学年交流、親子人権学習会（授業、講演会、学級懇談会）
・課題：須坂市の人権教育指導計画とのつながり、自分ごとにできる指導
＜常盤中＞
・１学年前期人権教育計画と実践について
各学級の言葉のﾙｰﾙ、各学級の人権ｽﾛｰｶﾞﾝ、ﾄﾚｼﾞｬｰﾊﾝﾄ（友達の良いところを見つける）
「ふりかえり」を大切にしている
＜墨坂中＞
・全体の集会→学年・学級
１学年「権利の熱気球」…だれが、どんなことを大事にしているか？
それらを知る活動　お互いの違う所・同じ所
学級「沈みゆく船」…誰を下ろすか⇔すべての人の命について

２　学んだこと
・「自分ごとにしていく」ための様々な工夫の必要性
・発達段階に応じて、個別の課題項目を扱っていくこと
・家庭や地域との連携（参観日、町別人権学習会等）
・生け花の命（生命力と儚さ）

３　助言者の指導　須坂市人権交流センター館長　畠山　信重先生
「性的マイノリティー」LGBT（Q）１３人に１人（左利きと同じ割合）
・DVD 視聴「あなたがあなたらしく生きるために」
・同性婚訴訟「私たちは特別ではない」、LGBT 配慮トイレ設置（誰もが使いやすい）
SOJI（ｾｸｼｬﾙｵﾘｴﾝﾃｲｼｮﾝ性的指向、ｼﾞｪﾝﾀﾞｰｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨｰ性自認）
LGBT 暴露（ｱｳﾃｨﾝｸﾞ）相談、ALLY（アライ：LGBT 理解者、支援者）
・差別を乗り越えた人の生き方、同和教育の充実、交流活動の大切さ、お互いの考えを知り合う

三　残された課題
・小中高で個別の人権課題をどのように網羅していくか。
・机上の話、正解を言う時間にならないための工夫　→　実践の意欲・態度

第５分科会　健康教育

一　研究テーマ

健やかな生活を支える食習慣のあり方

二　研究成果

１　レポート発表の概要

「小学校における食育指導の実際と課題」　　豊洲小学校　小林　智子　先生

基本的な生活習慣を整えること、とりわけ「食べること」は、子どもたちの「やる気」「がんばる力」「集中力」を高め、子どもたちが「なりたい自分」を目指す上で大切な土台となる。また、健康診断の結果からみえた食生活の改善が必要な児童、給食の残食が多い児童、朝から保健室で不調を訴える児童などの様子からも食育の必要性がうかがえる。

そこで、豊洲小学校では平成２４年度より「早寝 早起き 朝ごはん 食べたらはみがき すっきりうんち」を健康の合言葉に、養護教諭、栄養教諭と連携して計画的に食育指導を行っている。この実践を通して、学校全体で食の大切さについて関心が高まり、からだのことを考えて食べようとする子どもたちの姿が見受けられた。その結果、子どもたちの「がんばる力」へとつながっている。

２　学んだこと

食は子どもたちの「がんばる力」を支える大切な役割を担っていること、食育を通して「あなたのことがとても大事」というメッセージを伝えることができるということを学んだ。

３　助言者の指導

「子どもが育つ食のチカラ」　　長野県教育委員会保健厚生課指導主事　高橋　和子　先生

２００５年に食育基本法が制定されて以降、食育が推進され、朝食を食べてこない子どもや肥満傾向の子どもが減少した一方で、痩せ願望の子どもが増加したことは今後も課題として残っている。スキャモンの発育曲線より、中学３年生までは成長が著しく、身体の土台を作るために大切にしたい時期である。子どもたちが「がんばれるからだ」をつくるために、５大栄養素を意識したバランスのよい食事をとることが重要である。

また、ワークショップでは、簡単につくれるみそボールの作り方を教えていただき、グループに分かれて作り、味わった。

三　残された課題

「子どもを育てることは、次の親世代を育てることである」

子どもたちのからだづくりのため、生涯にわたって健やかに暮らすために食育は大切である。そのために学校や家庭、地域の連携が不可欠である。須坂市で行われている「つながる食育推進事業」を通して、さらに連携の在り方を追究していくことが、今後も課題である。

第６分科会　子どもと地域社会と環境づくり

一　研究テーマ　　学校と地域の連携のあり方

二　研究成果

１　レポート発表の概要

（１）「地域の「小布施音頭復活」までの道のり」　　栗ガ丘小学校　久保田　智絵美　先生

「どうして小布施にたくさんの人が訪れるのか」という学習問題より始まり運動会で小布施音頭復活（発表）に至るまでの約２年間３ヶ月の学習。その学習の中で担任の先生や子ども達は校内の先生方の指導・助言を受けたり様々な地域の方と出会ったり交流したりして学習を深めていった。

子ども達は学校に一茶の俳句の句碑があることに気づき、この句のことについて調べ活動を行った。調べる手立ては図書館の本のみとしたが、子ども達は意欲的に調べて学習を深めていった。この学習から端を発し先生や子ども達は、地域のことを詳しく教えてくださった原勝巳さんや関谷直美さんと出会う。そして、小布施音頭の作詞者の関谷一雄氏（関谷直美さんの父）の存在を知り、小布施音頭の存在に気づく。当初は小布施音頭復活に向けてなかなか積極的になれない子どももいたが、関谷さんの願いや思いを知り次第に小布施音頭復活の気持ちを高めていく。さらに、振り付けの小林さんの協力のもと地域の方、保護者、学校職員を巻き込み小布施音頭の復活を果たしていった。

小布施音頭復活には様々な人との出会いや関わりがあったが、小布施の「人を受け入れる」風土、そんな優しさや思いやりがある地域だったからこそできたのではないだろうか。だからこそ先生、子どもと地域がつながったと考える。

２　学んだこと

（１）教師の願いや子ども達の活動が学習を進むたびに深まっていった。教師も子ども達と共に学ぶことによって学習活動が楽しいものになる。そして、学習問題が子どもにねづくと自主的な学習が展開される。これからのことが相乗効果として、主体的、対話的な学びにつながっていく。

（２）まず、教師が積極的に地域のことを知ろうとすることが大切。そして、地域に出たり調べたりして行くことが、地域とつながる第一歩になる。

（３）学習する（インプット）だけではなく、学習して（地域の方と交流して、見学し、新しい事象と出会って）どうだったか、どんな学びがあったのかなど（アウトプット）することでより地域や地域の人に対してのおもいが強くなっていく。

３　指導者の助言

・学力向上、体力、不登校、いじめなど学校ではなかなか解決できにくい問題、子どもの減少、少子高齢化、若者流出など地域でなかなか解決できにくい問題などさまざまな問題を抱えているなかで、お互いに協力し、つながっていくことで問題は解決できないかもしれないが、学校も地域も元気になっていく。小布施音頭に当てはめると、小布施音頭復活のための学習や活動を通して学校と地域、地域と子ども、家庭と学校・・・とつながり、お互いがお互いの願いや想いを知ることで、コミュニティとしてつながっていくことができた。

・地域素材の良さとして、身近である、触れることができる、体験的に地域の学習をすることができる、地域の方々と共に活動ができる、郷土愛を育てることが出来る、などある。１教科だけの関連でなく他教科と関連させながら総合的に学習を進めることができる、そういう良さもある。

・小布施音頭を復活させる学習であったが、小布施音頭を復活させることを通して子ども達が育っている。

４　残された課題

・本年度の学習を次年度どのようにして受け継いでいくのか。

・小学校では今回のような大きな単元として組むことができるが中学校ではそれが難しい。小中の連絡をどのようにすべきか。

・指導者の高齢化で、学習が継続しづらくなってくる可能性がある。

・学校と地域をつなぐ仕組みをどのように作っていくか、またその仕組みを維持し発展させていくことも課題になってくる。

他に、グループに分けれて各校の現状などを発表し、学校と地域との連携のあり方を学び合った。また、指導者の先生からは北信各地の学校での実践を紹介していただき、学びを深められた。

地域と学校は協働活動である。その中で、学校が開かれてきている、学びが充実している、子ども達が成長している、地域の意識の変化、地域の活性化などの成果がある。反面、ボランティアの高齢化、さらに開かれた学校にするにはどうするか、居場所作り、運営委員会の活性化や周知の方法などの課題もある。

第７分科会　「子どもとスポーツ・遊び」

一　研究テーマ　子ども(児童・生徒)の運動習慣の形成と健全育成

二　研究結果

１　レポート発表

(1)「短時間で効果的なトレーニングを目指して」　　墨坂中学校　菅沼　孝太　先生

部活動の時間が削減されていく中で、無理をせずに必要な技能を身につけていくためには、限られた時間を有効に使う必要がある。そこで菅沼先生は、短時間で効果のあるウォーミングアップを行い、体力を向上させながらケガをしにくい体づくりを行うことが大切であると考え、女子バスケットボール部で実践を重ねてこられた。その一部をエピソードや映像で発表していただいた。ウォーミングアップに関しては、過去に実践の多かったサッカーを参考に、動きながら体の柔軟性を高めたり、体幹を強化したりする運動を継続的に行った。すると、動きの悪かった生徒が動きを改善したり、ウォーミングアップの様子からその生徒の弱い部分を見つけたりすることができた。まだ実践を重ねている途中であるため、さらに取り組んでいきながら効果を実証していきたいという。

(2)各校の実践発表

参加している先生方から、それぞれの学校で子どもの体力向上や運動習慣の形成に関して実践していることを紹介していただいた。

小学校では、朝の時間を使ってクラスや姉妹学級で運動する時間を確保している学校が多かった（高山、小山など）。また、マラソンカードを作成して子どもたちの意欲を高めたり(森上、日滝)、校内マラソン大会を実施したりしている学校(須坂)も見られた。体力テストを活用している学校も多く、日野小では１学期中に集計して結果を各学級に返し、２学期からの体育の授業に生かしているという。陸上大会への参加を積極的に行っている学校もあった（高甫、日滝など）。須坂市の「WeCan 元気」に取り組んでいる学校も多く（井上、旭ヶ丘、仁礼など）、仁礼小ではあらかじめ白線を校庭に引いておくなど子どもが遊べる環境を教師が用意しているという。

中学校では、体育の授業の初めに基礎的な運動能力を身につける時間を確保したり、クラスマッチや体育集会などを生徒会の活動として行ったりしている学校もあった。小布施中では、幼保小中連携の取り組み成果が出始めており、スポーツ障害に関する相談件数が減っているという。

須坂支援学校では、個別の支援に沿って毎朝 10 分間の運動を行っているが、施設面などの課題も多くある。

２　学んだこと

菅沼先生や各学校での実践を聞いて、大変参考になった。朝の時間を有効に使ったり、児童会や生徒会の活動に位置付けたりするなど、無理のない形で運動の機会を設定している学校が多く、それぞれの学校の実情に合わせて工夫をしているということが分かった。

３　助言者の指導

助言者の関先生からは、現代の子どもの体力にかかわる問題点やその解決の方法を、実技を交えながら具体的に教えていただいた。特に「背骨」「肩甲骨」の柔軟性がけがの防止とパフォーマンスの向上につながるということで、実際にストレッチや筋力トレーニングを教えていただいた。また、最近の研究で少しずつ重要性が分かってきた「腹圧」についても紹介をしていただき、それらの運動の即効性を感じることができた。

三　残された課題

・各校で二極化が進んでいることが課題として出された。運動が好きではない子どもに対してどのように運動習慣を形成していくかが課題である。

第８分科会　教育条件の整備

一　研究テーマ

児童・生徒が安心して学校生活を送るための教育条件整備はどうあったらよいか

二　研究成果

１　レポート発表の概要

（1）「学校徴収金の見直しについて」　仁礼小学校　赤松　美和　先生

仁礼小学校では各学年の会計報告の支出内容を見直すとともに、学校予算で購入する物品を増やすことにより保護者負担の軽減を行った。その実践の経過・成果・課題を紹介。

（2）「学校徴収金の見直しについて」　旭ケ丘小学校　元田　貴子　先生

旭ケ丘小学校では学校徴収金の集金方法、学年費・旅行積立への振り分け、集金回数について学校と保護者が互恵的関係を築けるように見直した。その実践の経過・成果・課題を紹介。

（3）「保護者負担の軽減」　相森中学校　小松　ゆり　先生

相森中学校では保護者負担の軽減を目指し、消耗品を一括購入し単価を抑え、経費を削減する取り組みを行った。また、各中学校のテスト印刷費用を調査し、公費化の可能性について考察した。その取り組みの内容・成果を紹介。

（4）「子どもの権利条約について」　上高井支部事務職員部常任委員　柳澤　雅人　先生

事例の紹介、ワークショップを通して「子どもの権利条約」について学び、保護者・教職員・ひとりの人として目の前の子ども達にできることについて問題提起を行った。

２　学んだこと・意見

・修学旅行のコースや卒業アルバムの内容について、すごく満足している。先生方にはいつも予算内で最善を尽くしていただいていると思う。今回のレポートから、事務職員の先生による保護者負担軽減のための努力が感じられた。口座振替への移行も、非常にありがたい。（保護者から）

・事務職員は細かい視点で学校全体の予算をチェックし、経費を削減し、保護者負担の軽減に努めることが可能だと思う。家庭の現状に常に寄り添いながら業務にあたり、教職員や市町村教委と連携を図りたい。（事務職員から）

３　助言者の指導　長野県教職員組合事務職員部長　小林　修　先生

・前任者から言われた通りに集金額を増額するのではなく、現状を分析し、目標を設定して取り組みを行っている。学校の中でＰＤＣＡサイクルを回していくことの重要性を感じた。（仁礼小）

・学校徴収金の集金回数について前例を踏襲し一般的な回数に設定するのではなく、教職員・保護者の意見を聞き適切な回数に設定している点がすばらしい。保護者の方は、会計監査の際も意見や疑問点があったら担任や学校に遠慮なく聞いていただきたい。（旭ケ丘小）

・学校の事務職員はほんのわずかでも経費を削減し、保護者負担を軽減する努力をしている。この取り組みでは、事務職員だけではなく研究主任をはじめとする教職員全員が組織として動いている。日頃からの事務職員と教職員のコミュニケーションが活きている。（相森中）

・子どもの権利条約を四つに分けるワークショップを自分でも行ったが、なかなか難しく、四つの権利が重なり合う部分が多かった。子どもが生きる・育つ・守られる・参加する権利を複合的に捉え尊重することが重要だと感じる。教育にかける予算を増やし、教育環境を整えること、子どもの意見を反映させることができるよう、努力していきたい。（事務職員部）

三　残された課題

・学校集金の内容だけでなく、業者から保護者が直接購入している教材についての把握。

・ＰＴＡの方から、金額はもちろんだが、普段使わない金融機関へ出掛けて入金する手間も負担、という声があった。

・テスト印刷の公費化について、市町村へ働き掛けていくことが重要。

第９分科会　情報教育

一　研究テーマ

教育現場におけるＩＣＴ機器の活用と情報モラル教育

二　研究成果

１　レポート発表の概要

（1）「マルティメディア作品の制作」　　相森中学校　　松村　勉　先生

・中学３年生の、消費者トラブル防止CM制作を通して「メディアの特徴を理解して活用していく能力」や「相互に意見を出し合って表現方法を工夫したり生活につなげていったりする実践力」を高めることをねらいとした学習の実践報告である。

・中学３年生の技術･家庭科の配当字数は年間３５時間で、それぞれ１７．５時間しか使えないという制約がある。そこで、技術分野の「情報モラルについての学習」と、家庭科の「身近な消費生活と環境についての学習」とを関連付けて学習が設定された。

・メディア作品の制作にあたっては、権利・責任・モラルについて配慮することを確認するとともに、県警の協力も得ながら制作に取り組んだ。作品を県庁の休憩室で流してもよいか、という問い合わせをもらったこともきっかけに、「公の目」に触れることも意識した作品作りを進めた。

（2）各校での取り組みや問題点についての発表

・小学校１・２年では、どういうねらいをもってやっていくかも考えねばならない。

・学年で段階をふんでやっていくことを計画する必要がある。機器や道具を使いこなせるようにする必要もある。

・年度当初に電子黒板やデジタル教科書の研修を行ったところ、抵抗感が少なくなってきた。

・小学校で慣れてきていることで、中学校ではＰＣを使うことがほとんど苦労なくできている。

・デジタル教科書の使用状況は、教科によって差がある。

・なかなか教室に来ることが難しい子の学習支援にはデジタル教科書が有効である。

２　学んだこと（助言者の指導から）

（1）職員間での情報共有や「情報の先には人がいる」という意識が大事。

（2）特殊詐欺もネット被害も根本としては同じこと。事例を知るということが大事。

３　助言者の講演から　　助言者：須坂市技術情報センター所長　小林　晃　先生

講演「今どきのＩＣＴ事情と情報モラル」

・現在は第４次産業革命の時代と言われている。ＩｏＴ及びビッグデータとＡＩによる革命の時代。現在の子どもたちはこれがひと通り終わった後に社会に出ていくことになる。

・ＩｏＴにより、すべての人とモノがつながり、様々な知識・情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、これまでの課題や困難を克服する社会が実現されると言われている。しかし、やはり「人と人がつながっている」ことが大事。

・現在しきりに言われている働き方改革だが、ポイントは「ＩＴによる生産性の向上」にある。クラウドの活用によって技術やノウハウの伝承・共有がしやすくなる。今はモノともつながるようになった。でも大事なのは「人と人とのつながり」。

・たまには「デジタルデトックス」として機器に触れない日を作ってみるのもよい。しかし、触れられないということが反動につながる面もあるので注意。

・リテラシー（知識）が不十分なうちは、被害に遭いやすい、ということを意識せねばならない。「ネットに匿名はない」ということ、「１回書かれたものは『デジタルタトゥー』として消せない」ということを知っておかねばならない。

・インターネットを使う目的をはっきりさせる。ルールは何のためなのか、という本質を忘れない。大切なことは相手のことを想像する力である。

三　残された課題

・各校での取り組みや課題において、数多く出てきた話題はＩＣＴ機器の活用に関して「教職員の抵抗感をなくす必要がある」ということ。実際に触れてみる、操作してみるということで「こういうものなんだ」と理解することができた、という声もあった。限られた時間の中でも、研修の時間を設けていくことが大切であることが見えてきた。

・生まれた時からデジタル機器に囲まれている子どもたちは、そうした機器に触れることに抵抗感が少ないが、それゆえに被害に遭いやすい危険もはらんでいる。助言者の講演の中にもあった、「リテラシー（知識）が不十分なうちは、被害に遭いやすい」という意識を大人も子どもも常にもっていなければならない。

第10分科会　国際理解・コミュニケーション活動

一　研究テーマ

英語を使ったコミュニケーション活動と国際理解教育

二　研究成果

１　レポート発表の概要・成果・課題

（１）　「Unit Goalに向かって学習を重ねる外国語活動の取り組みについて」

～３・４年生のコミュニケーション活動の充実に向けて～　豊丘小学校　元山　雄三　先生

- 子どもたちが必要感を持つようなUnit Goalをすえて学習展開の構築を積み重ねてきた。
  漢字クイズ（3年）、曜日ランキング（4年）→「子どもたちの心をつかむためのModel talk」、「常にToday’s Goal、Today’s Pointをふりかえることのできるワークシート」「中間共有を入れてのコミュニケーション活動の充実」
- Goalに向けて取り組むことで、子どもたちも教員も意識がぶれにくくなった。
- 子どもたちの実態をつかみながら柔軟な展開を考えていく。

（２）　中学校での実践、高校入試までにつけたい力について

相森中学校　佐藤　広基　先生　片桐　恵美子　先生

- 書く力をつける学習の一例　「音声→小文字のみ→正しい表記を観察→正しい表記を書いて覚える」
- 小学校から中学校へのつながり　文字に対する抵抗感がある。訓令式→ヘボン式（交通標識など）

（３）　外国語教育　小学校の取り組み　高山小学校　加藤　敦子　先生

6年生・４年生の実践より

- 実際に動きながらの活動だと意欲も増し、もっと話そうよく聞こうという姿勢が見られた。
- 多くの人と対話することで、読むのではなく話すということに変わっていった。うなずく、ジェスチャーも繰り返すことで自然とできるようになった。他の多くの先生方とも話せたことも自信につながった。

２　助言者の指導　前須坂小学校・須坂支援学校長　竹前　傳藏　先生

- 分科会での自己紹介（授業の疑似体験）顔と顔を合わせ、相手意識となって言葉を交わす。自分に扱える言葉で、自分の伝えたいものを表す。
- 教科書を教える。→教科書で教える。アレンジして先生が教科書を使えるように
- 繰り返して慣れ親しむ。表現のリピート（オウム返し）でなく、会話の中で表現を使いこなせるように授業を仕組む。（出川イングリッシュの素晴らしさ）
- 共有する　英語で話せると楽しい。好きな曜日から他者理解につなげていける。
  How many～？表現も文化理解につなげていける　漢字（表意文字）・高井鴻山（妖怪の絵）
- 子音の文字特有の音を理解できれば読む力の向上につながる。小学校でもヘボン式を扱っておきたい。

３　講演・ワークショップ　ALT　レッドフォードⅢ　ジェームズ　ウィリアム　先生

- 参加者自己紹介ゲーム…英語を使って5分間で5人と自己紹介しあう（趣味）
- カード集めゲーム　好きなスポーツを紹介し、カードをジャンケンで取り合う。
- ラインゲーム（丸太ジャンケン）10枚のカードを両端からI like～と言って進み、出会ったところでジャンケンする。先に相手側の陣地に辿りついたチームの勝ち。
- カレンダーゲーム　サイコロを振ってカレンダーの上を進み、What day is it?の質問に日付を答える。
- すごろくゲーム　サイコロを振っておはじきですごろくの上を進む。Cの印でカードを引く。What time is it? の質問に時間を答える。

４　助言者まとめ

- 英語教育における学びとは何か？　表現を覚えただけでなく、使わないと意味がない。
  「Don’t be afraid of making mistake’s! Be afraid not to challenge!」間違わないと間違わないようにならない。
- 英語の学習に完結はない。生涯続いていくもの。

三　残された課題

小学校で英語に親しむことはできてきているが、それを中学校にどうつなげていくか、今後もみんなで考え合いたい。

第１１分科会　特別支援教育

一　研究テーマ

学校・家庭・地域で連携して進める特別支援教育

二　研究成果

１　レポート発表の概要

（1）「保護者と創る授業」　仁礼小学校　河合　旗与昂　先生

発達障がいをかかえるA児の特性や関わり方について、クラスの児童が理解するにはどうしたらよいかを保護者と共に考え、授業を創った。自分の苦手なことと友達の苦手なところを出し合い、苦手さの大小の違いや考え方も様々だということに気づいた。また、苦手さがある友達にはどう接すれば良いのかをクラスで話し合ったところ、「（長い文を聞くことが苦手なら）絵を描いて説明すれば良い。」「（好き嫌いが多いなら）給食の時は、少し減らしたら良い。」等、子どもたちなりに友達のことを考えた意見が出た。毎月支援会議を開き、学校と家庭で連携することで、様々な視点から児童のことを考えられ、より良い学級集団作りができた。

（2）「まなびの教室の現状と関係者の連携について」墨坂中学校　まなびの教室　田幸　康宏　先生

平成１９年度に県内２校からスタートしたまなびの教室だが、現在は小学校３１校、中学校１１校となった。１時間の授業でいくつかの課題を組み合わせ、勉強の基本となる「学び方」について学ぶ。例えば、漢字が苦手な児童生徒の場合、苦手さの原因を探り、道具を工夫して学習できるようにする。また、ゲームを楽しみながら手先の運動やルールを守る経験をすることもある。まなびの教室の在り方としては、「達成感や満足感を味わうこと」「自分に合った学び方を見つけること」「自分の良さを知ること」である。そのためにも、学校、家庭、地域（医療、福祉等）で連携することが大切である。以前までの特別支援教育は、学校全体に合わせるような指導をしていたが、現在は、多様な子どもがいることを前提に、周囲がどう変わっていけるかが重要である。

２　学んだこと

（1）担任だけで話を進めるのではなく、家庭や関係機関と連携することによって、より柔軟にいろいろな角度から支援の方法を考えることができる。

（2）発達障がいをかかえる本人だけでなく、周囲の適切な配慮が必要である。

３　助言者の指導

子どもの困り感を自分事のようにとらえ、困難さは本人だけの問題ではないことを考えたり、障がいについての基礎理解を図ったりすることが大切である。学校では子どもの実態によって学習の場を変えることができる。また、必要かつ適当な変更・調整、過度な負担をかけないように支援するなどの合理的配慮も重要である。さらに、連携を図るための支援会議では、「何のために会議を開くのか」という目的を明確にし、支援の方法を決め、その後の支援の評価もしたい。学校、家庭、地域・関係機関それぞれに役割があり、子どもが社会に出て、生きていく上で必要な力をつけるために、互いに連携することが重要である。

三　残された課題

・家庭と学校だけでなく、地域や関係機関との連携の仕方について。医療へつなぐ場合は、ただ一任するのではなく、学校で十分な配慮や支援をしてからつないでほしい。

第１２分科会　表現力・感性、思考力の育成

一　研究テーマ　　子どもたちの豊かな表現力や感性を育てるための指導・支援のあり方
～心から本気で楽しく表現するために～

二　研究成果

１　レポート発表

（１）「音楽を取り入れた英語学習～小・中の学びを通して～」　　森上小学校　竹内　大輔　先生

①中学校における英語の授業で、授業開始の５分ほど英語の歌を歌うことで、表現力や感性、思考力の高まりを期待できるのか。また、小学校で同様の実践は効果的か。

②全員が英語を好きになることは難しいが、英語嫌いの子や苦手な子も、将来英語を学びなおしたいと思う時やチャンスが来た時に少しでも英語を好きであってほしいと願うことから始めた実践。

③身体でリズムをとりながら、踊りながら歌う生徒が出てくる。これも表現力につながる。ある英文の言葉の意味を読むだけではなく、歌を利用することで歌の雰囲気から言葉に込められた思いを推測することができた。

（２）「生徒たちが主体的に取り組む学習活動のあり方　～音楽のよさや美しさを感じ取り、思いをもって追究する喜びを味わえる授業のあり方～」　　高山中学校　水井　美穂　先生

①中学３年生「IN TERRA PAX～地に平和を～」の終曲の練習と並行して、組曲として戦争のことを歌った“反戦歌”であることを伝えたり、社会科の授業とタイアップして作曲者の視点からこの歌を作った背景を考えたりすることを通して、思いを膨らませながら曲を捉え直して表現する姿に結びついていった実践。

②学習カードやパワーポイントの効果的な使い方で２つの楽曲の比較鑑賞でそれぞれの曲の特徴やよいところを理解する姿の実践。

２　学んだこと（参加者の発言より）

（１）自分も英語の歌が楽しかったことを思い出し、現在完了形と過去形の違いを納得した。

（２）完璧でないと話せないと思っている日本人が多いが結構話せるもの。伝えようと思えばオーバーなジェスチャーで通じる。表現を重要視した授業展開をしてほしい。

（３）細かいところまで、生徒たちができるように準備されている。先生がヒントや考えのよりどころになるものをいっぱい用意し工夫し、子どもたちが深めていける。

（４）曲の背景を学ぶ、他教科と組んで学ぶことを仕組んでもらってありがたい。

三　助言者の指導＆課題

・**前面に楽しさを！**←伝える手段がわからない、無気力、めんどうくさいと言う、何もしない子ども達に。

・**「わかる！」内容をちりばめて授業を**。←「わかる！」がいっぱいあったら楽しいはず。

・体で感じ、知覚と結び付けて。

・「できる、できない」ではなく、**とにかくやってみる。**うまくできなくても、できないことが楽しい
→繰り返してやっていくうちに力になっていく。

・**「先生はあなたのこんなところも見ているよ」**小さなことも見逃さず**認める**→いきなり予想外の質問
「え！？なんだったっけ？？？」**集中力**

○人と触れ合い、音と動き表現とを散りばめた楽しい時間になった。
北島先生からいっぱい褒めてもらい、認めてもらったこと、それを見つける目、声がけを活かしたい。

第１３分科会　子どもと本

一　研究テーマ

子どもが読書に親しみながら、心豊かな生活を送れるようになるための、学校・家庭・地域の支援のあり方

二　オープニング　・・・たんぽぽの会のみなさんによる読み聞かせ

①詩の朗読（谷川俊太郎）②大きなかめ　③たぬきのおつきみ　④最初の質問

三　①ビブリオトークについての説明（文平須坂図書館館長さん）

ビブリオトークとは、知的書評合戦とも言われる。好きな本を持ち寄り、本来は一人５分間で本を紹介し、全員が終わったら、チャンプ本を選ぶ。次にチャンプ本になった人たちに紹介してもらい、全体のチャンプ本を決める。選んだ本に人となりがあらわれ、本を通して人を知ることができる。ブックトークとは違い、参加者が対等の立場で本を薦め合う。ゲーム感覚で楽しむことができる。

②デモンストレーション

「戦争と平和」をテーマに須坂市子ども読書支援研究会のみなさんにビブリオトークをしてもらった。ひとり（トーク２分＋質問１分）×３名）「海をわたった折り鶴」「へいわってどんなこと」「きみがおしえてくれた」の本を発表者が後ろ向きに並び、頭の上に持つ。「一番読みたくなった本」に挙手をしたところ「きみがおしえてくれた」がチャンプ本に選ばれた。

四　実際にビブリオトークをやってみる。

はじめに、各グループでビブリオトーク行い、クループのチャンプ本を選んだ。その後、全体でビブリオトークを行いチャンプ本を選んだ。（チャンプ本は「ぜつぼうの濁点」）

次に、持参した本を机上に置いて全員で取り上げられたすべての本を見て回った。お勧めの本の話を聞くのが楽しかった。今日、教えてもらった本は全部読みたいと思った。今日のために本を選ぶのが楽しかった。などの感想があげられた。

五　助言者の方によるご指導　　須坂市立図書館館長　文平　玲子　先生

ビブリオトークを行ったら、１回で終わりにせず、あまり間を置かずにまたやってほしい。季節ごとにとかテーマを決めるなど工夫すると、思ったことをまとめる力がつき、ビブリオトークの楽しさがより味わえる。

須坂市立図書館では、本屋さんから実際に絵本を持ってきてもらって購入する本を選んでいる。その他の本も写真と書評を丁寧に読んでみんなで選んでいるので、ぜひ、利用してほしい。

「読書は山登りに似ている。臥竜山に何回登っても槍ヶ岳に登れるようにはならない。少しずつレベルを上げていって、槍ヶ岳が登れるように、そして、最高峰を目指すようにしたい。」（信州岩波講座　高校生編の講演会で「神様のカルテ」の作者である夏川草介氏の言葉より。）

「読みたいこころに火をつけろ」はビブリオトークについて、「答えは本の中に隠れている」は選書について参考になる本なので、ぜひ読んでみてください。

六　これからに向けて

ビブリオトークはだれでもが楽しんでできるので、学校でも取り入れて、本に親しむ子ども達を増やしていきたい。まずは１回でも実践してみましょう。

あとがき

第６６回上高井教育研究集会当日、熱のこもったレポーターの発表をもとに活発な討議をしている分科会、実技を交えたりテーマに基づいた講演を位置づけたりしている分科会など、どの分科会でも工夫がなされ、学校・家庭・地域が一体となって教育の諸課題について解決に向けて取り組んでいこうという力強さを感じました。そして、助言者の先生方からは、その解決に向けた具体的なご助言やご提案をたくさんいただきました。感謝であります。

教研だより第１号でも触れさせていただきましたが、他郡市にはみられない独特の開催方式で行われる本研究集会には、子供たちに関わるＰＴＡ・幼稚園・保育園・公民館・諸団体等から毎年多くの皆様に積極的に参加していただいています。そして、本年度もテーマ別分科会に関係者が集い、抱える課題の解決に向けて、真剣に、時には和気あいあいと討議に参加するという本研究集会の素晴らしさを改めて認識するとともに支えてくださる方々の熱意と真摯な取り組みに触れることができました。

このように実り多き教育研究集会になりましたのも、分科会の運営に当たられた分科会長の皆さんをはじめ、分科会役員の皆さん、自校の参加者やレポートの募集・取りまとめをしていただいた学校代表の皆さんなど多くの方々のご尽力の賜物であります。そして会場を快く提供くださいました墨坂中学校の三溝校長先生はじめ諸先生方，生徒の皆さんのおかげであると、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

最後に，本教育研究集会推進に関われた三団体の代表者の皆様の日程を記し，次年度へ繋げます。

４月１５日	第１回三団体代表者会	・基本方針の確認，推進方法の確認等
	第１回推進委員会	・係分担・推進日程の確認，分科会希望調査の検討等
４月２５日	第２回推進委員会	・分科会設定に関する検討，提出レポート調査検討，他団体要請等
５月　９日	第１回学校代表者会	・基本方針・推進日程の確認、提出レポート等調査依頼等
５月２０日	第３回推進委員会	・参加者確認，分科会長選定・依頼，分科会助言者の選定等
６月１１日	第４回推進委員会	・分科会長会・中間連絡会の持ち方，レポート形式，他団体・来賓参加依頼等
６月１８日	分科会長・司会者打合会	・日程確認，討議題確認，研究計画の立案，分科会運営計画作成等
７月　８日	中間連絡会	・分科会討議計画・記録について、分科会要望書作成等
	第５回推進委員会	・参加者名簿の作成集計，要項作成，当日日程の検討等
７月１９日	第６回推進委員会	・集会要項校正，会場確認，係分担，
８月２０日	第２回学校代表者会	・レポート交換，集会要項配布
	第７回推進委員会	・今後の日程の打ち合わせ　使用物品・人数確認
８月３０日	分科会長会	・前日準備，反省まとめの依頼，当日の動きの確認
	第８回推進委員会	・前日準備，最終確認
８月３１日	教研集会当日	
１０月　１日	第９回推進委員会	・概要の編集，反省の集約，代表者会について
１１月１９日	第２回三団体代表者会	・三団体への答申，会計中間報告，反省総括等
２月１４日	第１０回推進委員会	・会計監査，反省

令和元年９月吉日

第６６回上高井教育研究集会推進委員長　今井　一弘